

---

# 月が落ちる、その前に。

六月 蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月が落ちる、その前に。

### 【Nコード】

N4137A

### 【作者名】

六月 蓮

### 【あらすじ】

僕が13歳になるこの年、月が僕たちの星に落ちる

## 0 世界

月が落ちる、その前に

## 0 世界

僕が生まれたその年、一般人に宇宙が開放された。当時は、お金が必要だったので、行ける人も移住する人もほとんどいなかった。僕の家族は、それ以前の問題でてんでこ舞いだったので、行けなかった。

僕が4歳になったその年、妹が生まれた。嬉しかったけど、僕に噛み付いたり舐めたりするので少し嫌だった。少しだけ妹のお守りをする事ができた。

妹はリーシャという名前になった。リーシャは春に咲く小さくてかわいい白い花の名前だ。かわいい妹にぴったりだと思ったけど、じいちゃんやんは農作業をしていくむしり取ってしまう。リーシャ草は雑草らしい。

僕が6歳になった年、僕は学校へ行き始めた。成績は中の上。まあまあだった。くねくねした気持ち悪い男の子が一番だったのがいやだった。たくさん勉強した。そうしたら次は僕が一番になった。くねくねの男の子は三番だった。二番は眼鏡をかけた女の子だったはずだ。

僕が7歳になった年、宇宙へ移住する人たちのためのロケットの運行が無料になった。

何故かは分からなかったけれど、妹も僕もまだ小さいので家族は行

かなかった。

僕が8歳になった年、5年後に月がこの星に落ちてくると発表があった。何で落ちてくるかは分からなかったけれど、このままでは僕らは死んでしまう、という事だけはわかった。学校の友達が、だんだんいなくなっていた。この年、妹が流行病にかかっててんてこ舞いだっただので、僕らは宇宙へ移住する余裕はなかった。

僕が10歳になった年、8人しかないクラスで1番になり、中級学校への特別進学ができるようになった。でも、中級学校には3人しか生徒がいなかった。僕はそこでも1番になったけれど、上級学校へは行けなかった。もうこの星に上級学校はなくなったらしい。みんな宇宙に行ってしまった。しばらくして、中級学校も宇宙に行ってしまった。僕は学校にいけなくなった。僕の家では農場をやっていて、農場は宇宙に持っていけないので、じいちゃんが宇宙行きを反対していた。僕も行きたくなかった。

僕が12歳になった年、遂にじいちゃんが折れた。折れたというのは骨じゃなくて、意見の事だ。農場は手放すらしい。じいちゃんとはあちゃん、母さんと妹の4人は宇宙に行ってしまった。父さんが仕事の都合でまだ行けないらしいので、僕は父さんと一緒にいくつもりだった。どんどんどんどん月が大きくなってきていた。

そして、僕が13歳になるこの年、月が僕たちの星に落ちる年

## 1 悪夢

### 1 悪夢

……

村に残っていた数人の大人たちの叫び声。

…何を慌てているんだろう。

「……事故だ…事故だって！」

…事故？

そしてみんなが僕に駆け寄る。

…どうしてそんな顔をしているの？ぼくが何かあったの…？

「……………！！！」

…何、なんだって？聞こえない。

「…イコル、お前の父さんが…！！！」

父さんが、何か？

……………え？

ロケット発射の事故で、死んだ？

ま、まさか。だって父さんと僕、あさって宇宙に行くなって約束した

んだよ？

準備だつて…もう家の中片付いたんだよ？

母さん達はもう宇宙だよ？ 父さんと一緒に行くんだ。

「イコル！！お前の父さんは、」

…なんで、父さんが…？ 嘘だよ…嘘だよ嘘だよ……

…ありえないよ。

……父さん、

僕を、独りにしないでよ……………

「……ル…コル…イコル!？」

誰かの呼ぶ声に、僕は目覚めた。

「……………リア？」

僕の目の前には、少女が立っていた。白い肌に緑の瞳、腰まで伸ばした茶髪に、袖のない白いワンピース。

リアは、少し心配そうな顔で僕を見ていた。

「…リア、どうかした？」

「うなされていたけど。嫌な夢でも見たの？」

僕は、リアの言葉で自分が汗で濡れているのに気がついた。そして、どんな夢を見ていたか少し考えた。

「……大丈夫だよ。昔の夢を見ただけ。…シーグは？」

僕はもう一人の同居人の行方を聞いた。シーグは僕の従兄弟の少年で、僕とリアと同じ13歳。シーグもリアも僕の家で住んでいる。

僕の父さんと、リアの母さん、シーグの父さんと母さんが今年の初めにロケット発射の事故に巻き込まれて死んでからずっと一緒に。

「タダイマ〜」

扉が開き、シーグが帰って来た。褐色の肌に青い瞳。肩まである銀髪は後ろで束ねていて、白いシャツとボロボロの短パン姿。背はリアよりも少し大きいくらい。

「お帰り、シーグ。…何処行ってたの？」

「何処って…花見てきたんだ。それ以外に何がある？」

シーグは呆れ顔を僕に向け、言った。僕は苦笑してみせ、バネのいかれたベッドからゆっくりと降りた。

「行つて来ます」

僕は木の扉を開け、外へ出た。目の前に広がるのは、緑一色の丘と、青く澄み渡った空。近くには、足首までしか水かさのない小川も流れている。

そんな見慣れた風景を特に気にせず、僕は人気のない通りを裸足で

歩く。履きなれているブーツを手にもって。自分の肌で、直に土を踏みしめていたから。こんな事ができるのは、もう5日間しか残されていなかったから。

行く先は1つ。いつも朝起きてすぐに家を出て向かう場所。父さんの眠る、墓地へ……。

## 2 墓場

### 2 墓場

この場所は、この地で死んだ人々が眠る場所だ。簡単な土盛りの上に、墓標として木の十字が刺さっている物がずらりと並んでいる。僕の父さんは、右の列の手前から6番目に眠っている。供え物らしいものは持ち手のとれたマグカップの水だけ。僕はそんな父の墓前にしゃがみ込んだ。

「……」

何も言わずに、目を閉じる。ただそれだけ。

父さん、僕は生きてます。

それだけを伝えるために毎日やってくる。

しばらくして、僕はしゃがんだまま目を開き、空を仰ぐ。

月が、大きく浮かんでいた。

いつか本で見た月は、真珠のように白く小さく輝いていた。

でも、今空にある月は、ただの石の塊だった。バケモノみたいに浮かんでいる。

そしてアレは、8日後にこの星とぶつかる。

そうになると僕は死んでしまう。

だから、みんなは宇宙へ行った。僕らは5日後の最後のロケットで、この星を離れる。

でも、僕には気がかりな事がある。

1つはリアの事。リアには、身寄りが1人もいない。シーグは僕の従兄弟なので、一緒に暮らすという事も難しくはない。でも、リアはそうじゃない。宇宙へ行ったところで出迎えはなしだ。そういう子供は、警察隊という軍事集団の青年隊に入れられるか、孤児院に



入れられるかのどちらかの道しかない。リアは警察隊を毛嫌いしている。だから、残された道は孤児院しかない。何年か前の戦争で、孤児院は子供たちで溢れかえっている事は誰でも知っている。寝場所も食料も奪い合い。…というのを、聞いたことがある。そんな所へ、リアが行くのは心配だった。それに、リアはいつも勝気だけど本当はとても弱い女の子だという事を、僕は知っている。そんな状況下でリアは、やっていけるだろうか。

もう1つは、花のことだ。この星には、1000年に一度だけ咲くという花がある。そして、今年はそれを見ることができた年だった。今はまだ固い蕾が閉ざされたままだ。父さんの研究結果では、それが開くのは多分6日後。つまり、ロケットの最終便が行ってしまっただギリギリ後だ。僕は、父さんが研究していた花にとっても興味があった。だから、宇宙へ行くのをギリギリまで延ばした。もしかしたら、開花が早まって見る事が出来るかもしれないからと思って。リアとシーグは、そんな僕のワガママに黙って付き合ってくれている。2人も、花には興味があるらしい。

「ずっと止まっていてくれればいいのに」

僕は、空に浮かぶ月を見て呟き、すっと立ち上がった。そして、裸足で土の感触を確かめるように、ゆっくり歩き出した。

### 3 事件

#### 3 事件

夜。僕たちはパンと水だけの食事を終え、何もする事なくボーっとしていた。

「あと、5日だな」

シーグがぼつりと呟いた。僕はバネのいかれたベッドから起き上がって、シーグに聞いた。

「そつえば、花はどうだった？」

「まだ蕾は固い。特に変わっては無いさ。……帰りあんなに遅かったのに、見て来てなかったのか？」

「うん、ずっと墓場に居たから」

「そうか」

シーグがぼつりと言って、また静かになった。

最近、僕たちはみんな黙ることが多くなった。これからの不安や、この星を離れることの寂しさに、静かに浸っているからだと思う。その時、バンと音を立てて家の扉が開けられた。

「失礼するよ」

やってきたのは警察隊の大人たちだった。どの大人も、太った身体にびったりと濃紺の制服が張り付いていた。奥の方で、口ひげを偉そうにたくわえている男が、僕たちをいやらしい目つきで見ている。リアは大人たちから隠れるように、テーブルの下に縮こまった。

「何の用ですか」

怯えているリアを守るようにして、僕は静かに尋ねた。

「薄汚い子鼠どもに命令だ。くだらん研究はやめて、さっさとこの星から離れなさい」

そして大人たちはじろりとリアを見て、

「リアーグレイスだな。おとなしく言う事を聞けば孤児院への紹介状を書いてやるう」

気持ち悪い笑みを浮かべた。シーグは、リアを抱きかかえて部屋の奥に連れて行った。

「あなたたちに何と言われようが、僕たちは残ります。帰ってください」

僕はきつぱりと言った。それを聞いて大人たちは呆れたような顔をした。

「仕方ないな……」

奥の口ひげ男が合図をした。すると、周りの大人たちは腰につけていた銃を手にとった。

「ワガママな子鼠どもにはお仕置きが必要のようだな」

僕はぐつと身構えた。すると部屋の奥からシーグが走ってきた。

「帰れ!!」

そして、前にいた大人に体当たりを食らわせた。

「イコル! 銃を取れ!」

僕はよろけた大人の腕から銃をひったくった。シーグは別の男の腕に噛み付いていた。

「このガキ!」

大人の一人が銃の安全装置を外し、シーグを狙った。

「シーグ危ない!」

僕は咄嗟に、自分の銃の安全装置を解除し、引き金を引いた。僕の撃った弾は、シーグを狙っていた男の足に命中した。

「ぎゃあ!」

男がピョンピョン跳ねた。他の大人たちは後ずさりをしていた。

「ぐつ……いったん退くぞ!」

ひげの男に指示されて、大人たちは帰っていった。足を撃たれた男は、おんぶされていた。

「やったね!」

「ああ!」

僕とシーグはお互いの顔を見合わせて笑った。

「イコル、シーグ……ケガはない？」

よろけながら、リアが奥から出てきた。僕らはリアに大丈夫だと言  
って笑いかけた。

「よかった……」

リアもようやく笑ってくれた。

でも一瞬の後、それは驚きの表情に代わった。

「それ……」

リアの目線の先には、僕らが握っている銃があった。

「大人たちから奪ったんだ。これで次にあいつらが来ても平気だか  
らな！」

リアはまっすぐ、僕らの元へ歩いてきた。

そしてまず、僕の視界が乱れた。天地がひっくり返ったように、僕  
は床に叩きつけられた。

次にシーグがひっくり返った。頬の痛みがきたのはその後だった。

「撃ったの？　ねえ人に向けて撃ったの？！」

リアは顔を真っ赤にして怒っていた。

「ああ……イコルが1発だけ」

シーグが言うと、突然リアは倒れている僕の上に馬乗りになった。

そして何度も何度も、僕を殴った。

「バカ、バカ、バカあ！」

僕の視界はまた、左右に揺れた。顔の痛みは、やっぱり後からきた。  
「やめろリア！　そうじゃないと俺が死んでたんだ！」

シーグがリアを羽交い絞めにした。お陰で僕の視界はようやく落ち  
着いた。

「足に1発だけ、だから相手は生きてるよ。そうしなかったら、オ  
レが死んでいた……きつとイコルも、リアも殺されていたんだ」

リアはポロポロと涙を流していた。シーグも泣いていた。僕の視界  
も、滲んだ。

「生きるためなんだ、全部」

シーグがぼつりと言ったのを聞きながら、僕はさっき引き金を引いた掌を見つめた。  
なんだか汚れているように見えた。

## 4 銃

### 4 銃

その事件の後、リアは僕たちから銃を取り上げた。

「こんなもの、こうしてやる！」

そう言つてリアは外へ出て、2丁の銃を家のすぐ近くにある小川へと投げた。遠くの方から、水の跳ねる音がした。

そのまま僕らは、お互いに何かを話すことなくベッドに潜つた。殴られた頬は長く痛み、しばらく僕を寝かせてはくれなかった。

そうして数時間経つた頃、僕は誰かに揺り起こされた。

「……コル……イコル」

僕を起こしたのは、シーグだった。

「シーグ？」

シーグは口元に指を置いて

「静かに！ ちょっと、こっちこいよ」

そう言つてランプを持ち、外へ出て行つた。僕はそれに着いて行つた。

「どうしたの？」

「さつき、リアが投げた銃、探せ！」

シーグは小川の流れている辺りで、かがんでいた。

「でも、リアが……」

「でも何かあつた時、リアを守れるのは俺たちしかない」

シーグは真剣な、まっすぐな瞳で僕を見た。

「……………」

僕は何も言えなかった。胸がドキドキした。

「俺たちは、大人の言いなりになっちゃいけないんだ。俺たちの夢

を、この星の最後の夢を諦めちゃいけないんだ」

「……………」

「……その為には、多少汚れることもためらっちゃいけない」

「……………うん」

僕は軽い返事しか出来なかった。でもシーグはそれに納得したように、また辺りを探し始めた。僕も小川の周辺の草むらを探した。

「あつた」

シーグが少し離れた小川の中から銃を拾い上げた。銃口からは水が滴っている。

「あ……………」

僕はその銃を見てすぐ、それがすでに使えないことが分かった。あれだけ水に濡れていれば、火薬は駄目になっているだろう。

でも僕はその事実を口にはしなかった。

「そつち、見つかったか？」

シーグに言われ、僕はまた辺りを探した。すると、ちょうど草むらの中に、黒く光る銃がかくれんぼしていた。ギリギリの所で水には濡れていない。

「あつたよ、ほら」

僕はおどけてシーグに銃を向けた。シーグは軽く笑ってよかったと言って、ポケットから布切れを出し、それで銃を包んでしまった。僕も安全装置をかけたあと、ハンカチで銃を包んでポケットに入れた。

「さ…戻ろうか。リアにバレないようにな」

シーグは踵を返して家へ向かった。僕もそれに従った。

## 5 キス

### 5 キス

ロケットの最終便の発射まで後4日になった日、僕は朝から父さんの眠る墓場にいた。来る途中の道で見つけたリーシャ草を摘んで飾ったり、家の庭で育てていた木苺の実を供えたり、マグカップの水を新しくしたりした。

「……………」

父さん、僕は生きてます。

僕のこの報告を、父さんはちゃんと聞いてくれるだろうか。

「……………」

僕は目を開けてから、墓前で銃を解体し始めた。実は僕は、中級学校で少しだけ銃の扱いを学んだことがあった。当然、的に向けて実際に撃った事もあった。百発百中とはいかないけれど、射撃クラブの先生には筋が良いと言われた。

「いーち、にい……………」

僕は残り弾数を数えた。残りは4発撃てる。今度また大人たちが襲ってきたときは、慎重に扱わなければならない。

僕は銃をしまつて、立ち上がった。

「父さん、また来るからね」

僕はそう言つて、家への道を戻った。朝は何も食べなかったのので、ひどくお腹が減っていた。早く帰つて3人で何か食べよう。庭の木苺を使ってジャムを作つて、パンに塗ったらきつとおいしいはずだ。そんなことを考えているうちに、僕の足取りはだんだん速くなつていった。

しばらく歩いていると、家が見えてきた。そして、扉を開けようと



思った僕は変な声に気がついてその手を止めた。

「あ……」

出したと言うより、“漏れた”声。リアの声らしい。

僕は不思議に思っ、扉から離れて窓の方へ向かい、中を覗きこんだ。

「……………」

僕は凍りついた。一瞬で頭から足先までが冷たくなり、背中や脇から嫌な汗が滲んできたのが分かった。そのうちに、足が震えてきた。ソファの上でリアとシーグがきつく抱き合っている。

「……シー……グう」

「ああ……リア……」

そして僕が見ているとも知らずキスをした。

「……………」

嫌な汗がじわじわと、シャツに染みていった。心臓が、今にも飛び出しそうなほどドキドキしていた。僕は思わず、頭を抱えてその場でしゃがみこんだ。

「……嫌だ」

同時に、僕の中の何かが音を立てて崩れた。

「嫌だ、嫌だ……」

僕はそろそろと後ずさりし、走って逃げた。あの、花の丘へと。

「はあっ……はあっ……」

酷くグラグラした視界の中を、僕はまっすぐに走った。

「はあっ……はあっ……はあっ……あっ！！」

石に躓いて転び、丘の斜面へダイブした。

荒く息をしながら起き上がったそこには、弾ける寸前まで蕾の膨らんだ花の群れがあった。膨らんだ蕾は、抱き合う二人のようにぎゅっと固かった。

「うおおおおおおあああああああ！！」

胸を締め付けるような気持ちに、ただ叫ぶしか出来なかった。涙は自然に流れ、そして、

「うあつあつあうっ…、げええ……」

僕はお腹の中のものを吐いてしまった。それでも、僕の胸は楽にはならない。

孤独という槍が、僕の身体を貫いているようだった。

「ぜえ……はあ……」

見上げたそこには岩の塊みたいな月が浮かんでいる。そいつはまるで蔑むかのように、僕を見下ろしていた。

「死んでしまえ……」

ふと出た言葉がそれだった。もう、止められなかった。

「死んでしまえ……死んでしまえ……死んでしまえ、死んでしまえ死んでしまえ……」

“誰が”かは分からない、でも僕は込み上がる衝動を抑えられなかった。衝動に任せ、ポケットから銃を抜く。ゆっくりと安全装置をはずし、狙いを、あの月へ。

「死んでしまえ……死んでしまえ……」

僕は撃った。反動で腕が跳ね、僕は仰向けに倒れた。

弾は届かなかっただろう。でも僕の衝動は、ほんの少しおさまった。

「うつ、うつ……うつ……」

僕はただ泣いた。

お腹が減っていたことなんて、すっかり忘れていた。

## 6 告白

### 6 告白

ロケットの最終便の発射まで後4日になった日、僕はリアとシーグがキスをしている現場を見てしまった。それは、父さんが死んでからずっと抑えていた、僕の様々な感情を剥き出しにさせた。怒りや嫉妬、焦りや孤独は、僕の心に大きな穴を開けていった。

そして僕は、次の日のお昼過ぎにベッドの上で目を覚ます前までの事を全く覚えていない。いつ家に戻ったのか、その時の自分がどんな様子だったのか、結局ご飯は食べたのか、二人とは話をしたのか……僕は分からなかった。

「……イコル…イコル？」

突然、リアの顔が僕を覗いた。

「うわ！」

僕は驚いて、椅子ごとひっくり返ってしまった。

「きゃ！」

リアの小さな悲鳴の後に、僕は後頭部を思いきりぶつけてしまった。

「おいイコル…大丈夫かよ」

僕の上から、シーグの声が降ってきた。

「イコル…大丈夫？ 立てる？」

リアの声も、上から降ってきた。

「……見下ロサナイデ……」

「……………」

僕は何も言わずに自分で起き上がった。リアが僕に手を差し出していたけど、わざと知らないフリをした。

「お前、昨日からヘンだぞ？」

……当然ダロ？ アンナモノヲ見セ付ケラレテハ……

「……………」

「……イコル？ 具合悪いの？」

「……別に大丈夫だよ。花のことを考えてたんだ。心配しないで」  
僕は無理やり笑って、嘘をついてみせた。自分で自分が、とても奇妙に思えた。そんな僕を見て、シーグは何かを考えているように、眉根を寄せた。

「イコル、ちよつといいか？」

突然シーグが、僕の腕を掴んだ。シーグの手は酷く汗ばんでいて、また力強かった。

「なに？」

「……話があるんだ、二人だけの」

僕は胸の奥から湧き上がる不安を押し殺して、頷いた。

「花の丘に行こう」

そう言って、僕らはリアを家に残して丘へ向かった。シーグはずっと腕を掴んで離さなかった。

丘へ着くとすぐ、シーグは僕の腕を離して、座ってくれと言った。

僕はそれに従った。

「話って何？」

僕は平静を装いながら、シーグに問いかけた。シーグは拳を硬く握って俯いた。

「あなさ……」

シーグは、ぼつりぼつりと話し始めた。

「俺たちもうすぐ、この星離れるんだよな」

「うん」

「この星離れたら、俺はお前と一緒に暮らすんだよな」

「そうだね」

僕は敢えて、淡白に返事をした。

「でもさ、さすがにリアはそうじゃないだろ？ 血は繋がってない

からさ。アイツ、宇宙へ行っても誰も身寄りいないんだよな」

「……うん」

「この間の大人も言っていたけど、リアは孤児院に入れられることになるんだろ。リア、耐えられるかな」

「そうだね。リア、本当は寂しがりやなのに強がりだからね」

「そう！」

突然、シーグは声の調子を高くした。

「そう、アイツは寂しがりやなんだ。この間、リア俺に言っていたんだ。本当は宇宙に行くのが怖い。それならこの星に残っていたい。でも死にたくないって」

シーグはひと息で言って、少しむせて咳をした。

「俺、リアを守りたい」

そういった横顔には決意が満ち溢れていた。僕は次第に焦りを感じた。身体中から汗が噴き出た。まるで、天敵と対峙する小動物のよう……

「ぼ……僕だって」

「そういうんじゃないんだ。俺は、リアを守りたい。一人の男として」

僕は、シーグの言ったことが聞き取れなかった。そして聞き返す前に

「俺はリアが好きなんだ。愛してるんだ！」

告白されてしまった。僕の身体は、電流でも流されたかのように大きく震えた。そして、あの二人のキスを見たときと同じ衝動が、胸を衝いた。

「俺、昨日、それ言ったんだ。つい勢いで、言っちゃったんだ」

シーグは耳まで真っ赤にしていた。対する僕は自分が青ざめているような気がした。

「そしたらリア、泣いちゃって、顔ぐしゃぐしゃにして、それがすごく、かわいくて……」

第二の爆撃の予感に、僕は身を硬くした。

「俺、アイツを抱きしめて、キスしたんだ」

再び、ドンと衝かれた。

「何度も、何度も……………」

シーグは手を握ったり緩めたりを繰り返している。僕はそれを呆然と見つめた。

「俺、それからの事あんまし覚えてなくて」

聞キタクナイ、

「あんまりうまく言えないんだけど……………」

聞キタクナイヨ、シーグ。ヤメテ、

「あのさ……………その後さ……………」

聞キタクナイ、ヤメテヤメテヤメテ……………!!

「気がついたら、俺もアイツも裸だった」

「……………」

「リアもさ、泣きながら笑ってて、恥ずかしいねって……………」

僕は今、どんな顔をしているだろう……………

「俺、18歳になったらリアと結婚するんだ。リアと約束したんだ」

泣いているかな? 笑っているかな?

「……………イコル?」

シーグはようやく、僕に気づいた。

「……………もうやめて」

僕はようやく言葉を発することが出来た。でもその声は、虫の鳴き声のようだった。

「イコル?」

「もうやめて……………」

僕の視界が、一気に涙で滲んだ。

「イコル、どうしたん……………」

「やめてくれよおッ……………!!」

声と一緒に、涙と唾が飛んだ。

「……………イコル」

「もう、聞きたくない」

シーグは立ち上がって、僕を見下ろした。

「お前……まさかお前も、リアの事……」

僕は、何も言わなかった。正直、何も考えていなかった。

「そうなのか……？」

シーグはよろよるとその場に座り込んだ。

「そうなのか……ごめんな、気づけなくて。……俺、お前の家族失格だわ」

そう言つて、一人溜息をついている。

コイツ、何ヲ勘違いシテルンダロウ……

「辛かったよな、よく話聞いてくれたな。俺がお前からこんな話聞いてたら、きつとお前のことぶん殴つてた。……ありがとう」

そう言つて、シーグは頭を垂れた。

アリガトウ？ 何ヲ勘違いシテルンダ……

「構わないよ、シーグ。シーグは僕の大切な家族だよ。これからはリアとも家族になれるんだね、僕嬉しいよ」

僕の口からは、ひどく優しい声が出た。別人が喋っているような感覚だった。

何故なら僕の中ではこの言葉と全く逆の感情がぐちゃぐちゃと蠢いているからだ。

「イコル……」

シーグは僕の言葉に涙ぐんだ。

「ありがとう……ありがとうイコル」

「うん、構わないよシーグ」

僕は立ち上がり、一人歩いていった。

「イコル、どこ行くんだ？」

「父さんの所。リアが家族になるんだ。報告しなきゃ」

僕はシーグに背を向け、墓場へ向かった。

蠢く感情は、歩いているうちに僕の優しい感情をゆっくり飲み込んでいった。

「……死んでしまえ……」

僕の口からは、もうそれしか出てこなかった。

## 7 独り

### 7 独り

父さんのお墓の前で、流れる雲と大きな月を見ながら、僕は一人考えていた。

僕は、僕に隠れて抱き合ってキスをしたシーグとリアに対して、激しい憤りを感じた。どうしてだろう……シーグに嫉妬したのか？それなら、僕はリアのことを恋の対称として好きなのだろうか。確かにリアの事は大事だった。だから恋心がなかったとは言い切れない。でも、僕のリアへの気持ちは恋というよりもむしる愛だった。それは恋人同士の愛ではなく、家族への愛のようなものだった。そしてシーグの事も、リアと同じように僕にとっては大切な大切な家族だった。

それならどうして、僕はこんなに憤りを感じるのだろうか……

そんなことを延々と考えているうちに、辺りは真っ暗になってしまった。僕は父さんにおやすみを言って、家へ戻った。帰り道はあまり気分がよくなかったけれど、それでも僕は歩いた。家が見え出した頃には、僕は走っていた。

「ただいま」

扉を開けたそこには、シーグとリアがちゃんといた。

「……………あれ」

2人はいたけれど、部屋がひどくすっきりしている。宇宙へ行くためにまとめておいた3人分の荷物が無いのだ。部屋にはもう、ベッドとテーブル、椅子が2脚しかない。

「ねえ」

嫌な汗が流れる。



「ねえ、荷物どこいったの？」

沈黙。……どちらも答えてはくれない。

「ねえ、荷物はどこ？」

「宇宙に送ったんだ」

うつむいたまま、シーグが言った。

「なんで？」

「もう気が済んだろ?!」

シーグも怒鳴る。それでも、その目は僕を見ない。

「夢を追いかけるのはいい事だ。でも、それって命を犠牲にしていまする事か？」

シーグの言葉に、胸が衝かれた。

「あのね、イコル」

椅子に座っていたリアが立ち上がった。その目はやはり僕を見てくれない。

「さつき、警察の、大人たちがきたの。月の落下が早まりそうだから、明日ここを発ちなさいって。だから、それに従って荷物を先に送ってもらったの」

僕の胸の底が、ざわざわと蠢いていた。

「じゃあ、花は？」

二人ともようやく、僕を見た。

「花はどうするの？ この星で最後の夢、一緒に叶えようって約束は？」

僕を見る2人の目は、哀れみに満ちていた。

「まだそんなことを言っているのか」

「イコル、私たちも、大人にならなきゃ」

胸の蠢きは、僕を突き破った。

「大人って……大人になることが、そんなに大切なのか？ 僕は大人みたいに汚れたくない。キミたちみたいに汚れたくない!!」

それは、言っではいけないコトバだった。

「……………」

同時に、最も言いたかったコトバだった。

「……そうか」

シーグはそう言ってリアの手を握った。

「じゃあ、俺たちは行くよ。お前はここで、いつまでも子供のままでいろ」

あ……

「イコル、よく考えて。ロケットは明日、太陽が地平線に沈む瞬間に発射するから」

ああ……

「行くぞリア。もうこいつに構うことなんかないんだ」

ああ………

扉は閉まった。ぱたり。

ああ。ようやく理解した。

僕はシーグに嫉妬しても、リアに恋してもいなかったんだ。

僕は怒った。

怒ったのは、ただの強がりだったんだ。

本当は、僕はこわかったんだ。

独りになることが。

リアとシーグが、2人だけで何処かへ行ってしまうことが。

寂しかったんだ。

独りになることが。

あの月や、この星のように、独りぼっちになることが。

僕は怖かったんだ。

あああ、

ああ、  
ああ、

あああああああああ  
！！！！！！！！！！

## 8 月と僕と、この星と

8 月と僕と、この星と

月は、独りぼっちだった。

ずっと独りで耐えてきたんだ。

……独りは、寂しかったよね。

僕は、独りぼっちになってしまった。

大好きな人が離れてしまった。

……独りは、寂しいよ。

そしてやがて、この星も独りになる。

乱暴に扉が開かれたバンという音で、僕は我に帰った。

「……まだいたのか」

扉を開けたのは、警察隊の大人だった。珍しく今日は、一人しか来ていない。それに今日の人は若かった。20代後半……だろうか。

「……………」

「お前の仲間はちゃんと従ったぞ。強情な奴だな」

男の人はふうと溜息をついて、僕の腕を掴んだ。

「……子供が何泣いてやがるんだ」

僕は掴まれていないほうの手で、自分の頬を撫でた。しっとり濡れた。

「この星を離れるのは、寂しい気がするけどな」

少し驚いた。この人は、今までの大人たちとは違った。

「ガキ、この星はもうすぐ滅びる」

男の人は、小さく悲しそうに笑った。

「そんな星にまだ夢を期待するのか？」

悲しい笑いは、消えた。

「まだ何か求めるのか？」

僕の心も、静まった。

「もう、そつとしといてやれよ」

腕を掴む力が、強くなつた。

「さて、俺は仕事をするぞ」

「……僕を連れて行くの？」

僕が聞くと、男の人は頷いた。

「国からの命令なんだ。国民全員の強制星外退避」

「逆らつたら？」

男の人は大きく溜息をついて、

「こつする」

と言った。

僕の意識はそこで途切れた。

## 9 シーグとリア、そして僕

9 シーグとリア、そして僕

「……………」

目が覚めるとそこは、知らない部屋だった。  
ベッドがひとつと、木のテーブルと椅子。とても狭く、薄暗い部屋だった。

どうやら僕は、警察の施設へと連れてこられたらしい。

僕はベッドから起き上がろうとして、

「いた！」

お腹の痛みに気がついた。シャツをめくってみると、どうやら殴られたらしく、赤くなっていた。

「行かなきゃ……………」

僕は、僕自身を奮い起こすように、呟いた。

ドアの鍵が閉まっていたので、僕はポケットに手を伸ばした。

冷たい銃は、そこにあった。

「取られてなかった……………」

僕は安堵のひと息を着いた後、銃の安全装置を外し、ドアのノブに銃口を近づけた。

そして、撃った。

銃声が響いて、ドアの鍵のつなぎ目部分はキレイに壊れた。

「行かなきゃ……………」

僕は勢いよくドアを開け、施設を出た。途中で施設の職員らしい人に追いかけられたが、運良く撒く事が出来た。

そして僕は、花の丘にいた。

蕾はかなり膨らんでいる。あと少しで咲きそうなのに……………」

「イコル」

背後から、誰かの声がした。

聞き覚えのある……そして、一番聞きたかった声。

「シーグ？」

僕は振り返らずに応えた。

「お前、やっぱり怖くなっただんだな」

そう言ったシーグの声は、なんだか怒っているように聞こえた。

「俺たちを汚れていると言って、あんなに子供みたいに駄々こねて

……その結果やっぱり怖くなって逃げるのか。臆病者」

僕はシーグを見た。その目は僕を蔑んでいた。

「僕は臆病者じゃない！」

「言い訳する気か！」

シーグは僕に、感情を剥き出しにしていた。こんなシーグを見たのは、初めてだった。

「臆病者、お前だってしつかり逃げてるじゃないか」

「違う！」

「何処が違っただ？！」

シーグはまるで僕に取り合ってくれない様子だった。そのうちに、本当の事を言う気も、失せてしまった。

「本当の事言っとな、俺ずっとずっと怖かったんだ」

シーグは突然口調を変えた。

「リアが……リアがお前の事好きになるんじゃないかって。お前たちがお互いを好きになって、俺独りにされるんじゃないかって……」

ああ、シーグも、

「俺にはもう親も兄弟もいない。親戚はいても、俺は親父たちが死んだあの日、独りになったんだ。でも、イコルとリアがいてくれて、俺、自分が独りじゃなくなった。でも、俺本当はずっと寂しいままなんだ！」

シーグも同じだったんだ、僕と。

「リアも、そうなんだ。だから俺、リアを守りたいけどリアにも守られないんだ！」

シーグはそう言って、僕を睨んだ。

「お前は俺を独りにする」

その手には、黒く光る銃が握られていた。

「だから俺、お前が憎い、お前を殺したい」

カチリと、安全装置は外された。

「ゴメンなイコル……」

シーグは銃を僕に向けながら、泣いていた。

「俺、お前の事好きだった……」

引き金に、指がかかった。

「でも、同じくらい大嫌いだった」

シーグは、引き金を引いた。

.....。

「え？」

シーグは目を丸くした。引き金を引いても、弾が、出ない。

「ぷ」

僕は、軽く吹き出してしまった。

「……アハハ、シーグ、その銃、リアが投げちゃったとき、水に濡れたでしょ？」

シーグは表情をなくしている。

「あの時に、火薬が湿って使い物にならなくなったんだよ？」

僕は、餌の小動物を見つけた野獣の気持ちになった。

「ねえ、シーグ」

シーグは僕を見て、ひどく怯えていた。

「僕ね、シーグの事、好きだったんだよ」

僕は腰のポケットに手を入れた。

「でもね、やっぱり同じくらい大嫌いだったよ」

そして一瞬で狙いを定め、引き金を引いた。



ぱん！

軽い音の後に、シーグの頭の向こう側が弾けた。  
中級学校でトマトを的にして撃った時と、大差はなかった。  
シーグは地面に倒れ、しばらくガクガク震えてから、動かなくなっ  
た。

死んだ目で虚空を見つめて、口から泡を吐いていた。  
大好きだった友の最期は、ひどくあっけないものだった。

「シーグ……！」

背後から聞こえた悲鳴に、僕は驚いた。

聞き覚えのある……そして、今一番聞きたくない声。

「リア……！」

リアはまっすぐに、倒れているシーグに駆け寄った。ハンカチで彼  
の口の泡を吹き、額の中心に開いた穴を塞いだ。

「シーグ、シーグ……！」

リアは死んだ恋人の頭を抱えて、泣いた。

僕にはまるで気が付いていないようだ。

「シーグ……！ 目を開けて！」

ねえ、リア、

「逝かないでよ、ねえ！」

リア、僕を見てよ、

「シーグ、約束したでしょ！？」

僕の事しかつてよ、人殺しって、罵倒してよ……

「一緒に宇宙に行こうって……！」

見てよ、僕ノコトヲ、見テヨ……

「いつまでも2人でいようって……！」

ドウシテ、僕ヲ見テクレナイノ？

死ンダシーグヨリ、生キテイル僕ヲ、見テ

「リアああ……！」

僕の想いは、声にならないくらいだった。

「シーグ……あたしを独りに、しないで」

死んだ恋人の頭を抱きながら、リアは僕を見た。

「武器は嫌い。人を殺すために産み出されたものだもの」

少女は、死体の頭を地面に寝かせた。

「武器を使う人は、嫌い」

そしてゆっくりと立ち上がり、僕に寄る。

「あなたなんて、大嫌い！！」

がつん、と大きな音がして、僕はひっくり返った。

リアが僕に馬乗りになって、殴った。その手には、尖った石が握られている。

「どうして殺すの？ どうして殺すの？！」

がつん、がつん、

僕は何度も殴られる。肉の裂ける音がして、頭がくらくらする。

そのうち、右目の視界が、血で真っ赤に染まった。

「どうして殺すのよ？！」

心の底からの疑問を叫びながら、彼女は僕を殴る。

それは、僕を殺すための行為だ。そして、

がつん！

一際大きな衝撃が僕を襲った。意識が一瞬遠のく。

その時僕は思ってしまった。

死ニタクナイ、殺サレタクナイ

僕は殴りかかってくる彼女の腕を掴んで、一撃を防いだ。

そのままくりと身体をひねり、彼女を僕の上から引きずり下ろす。そして空いている手で近くに落としていた銃を握り、

ぱん！

彼女を、愛するリアを、僕を殺そうとした女の子を、撃った。  
銃弾は彼女の胸に当たったが、貫きはしなかった。

「あああ」

リアは倒れた。さっき死んだ恋人と並ぶような位置に。

「シーグ、シーグ……」

リアは、恋人の手を握った。

「これでずっと、ずっと……」

最後に涙を流して、少しだけ震えて、少女は絶えた。

我に返った時、突然彼女に殴られた痛みがやってきた。

「あっ」

僕の意識は、また遠のいた。

このまま意識が戻らなければいいと、願った。

## 10 崩壊、そして……

10 崩壊、そして……

気が付くとそこは、知らない場所だった。

「気が付いたか」

傍にいる人も、知らない人だった。白衣を着て、白いマスクをしている。どうやら医者のようなのだ。

「……ここは？」

僕はベッドから起き上がった。壁一面の巨大スクリーンに広がっていたのは、青く丸い星と、その星にめり込んだ小さな岩の様子だった。

「ここはコロニー。我々の新しい世界だ」

医者は淡々と説明した。

僕たちのいるコロニーは、宇宙に無数に浮かんでいる簡単な施設で、新しく人の住める惑星が見つかるまでは、ここで暮らさなくてはならないらしい。

人々は、5日前の最後のロケットで、星に住んでいた全員がコロニーに移住した。そして、僕が目覚める前の日に、月と衝突したらしい。

結局僕は、父さんにお別れを言えないまま、宇宙に来てしまった。

「お前の家族は居住区エリア356-Eに住んでいる。まあ、お前にはしばらく入院が必要だがな」

そう言っ、て、医者はマスクを取った。そこにあった顔は、僕を警察隊の施設に無理矢理連行した、あの警察隊の大人の顔だった。

「あ……」

「感謝しろよ。あの丘でお前を拾ったのが俺じゃなかったら、お前あの星に取り残されていたんだからな」

警察隊の医者は言った。移住しなくてはならない“星に住んでいた

全員”の中に、犯罪者は含まれていないのだと。僕らの住んでいた町から離れた都会や、子供の知らないところでは、移住の混乱などで犯罪が急増していた。そこで国の偉い人たちは犯罪者の移住を認めずに、彼らを刑務所などの施設に拘束し、星に残したらしい。とても汚いやり方だけど、仕方ないんだと警察隊の医者は最後にぽつりと言った。

「ん……………」

突然、警察隊の大人が眉をひそめて、壁のスクリーンを見た。

「あれは……………」

僕も身体を起こし、そちらを見た。

「あ……………」

スクリーンでは、重なった2つの星を背に、白い花が舞っていた。

それは、僕の夢の花だった。

「花だ……………」

花はくると回りながら、宇宙を舞っていた。

それは、僕らの星の、涙の粒だった。

「ああ……………」

僕たちが捨てた世界は、最期の最期に、夢を叶えた。

「ああ……………」

その時ふと、

俺たちの夢を、この星の最後の夢を諦めちゃいけないんだ

シーグの声が脳内に響いた。

そうして、僕の中で2人が止まらなくなった。

ああ、

俺、リアを守りたい

うなされていたけど。嫌な夢でも見たの？

イコル、私たちも、大人にならなきゃ

ないで

……あたしを独りに、し

イコル、どこ行くんだ？

バカ、バカ、バカあ！

生きるためなんだ、全部

……シー……グウ

帰れ！！

俺、お前の事好きだった……

何処って……花見てきたんだ。それ以外に

何がある？

ああ……リア……

イコル、よく考えて

武器を使う人は、

嫌い

お前はここで、いつまでも子供のままでいろ

これでずっと、ずっと……

目が熱くなつて、視界が滲んで、頭がズキズキして、汗がじわじわ出て、

そして、僕の胸に穴が開いた。

「おいお前、大丈夫か？」

すぐ近くにいる大人の声が、なんだか遠くから聞こえた。

僕の頭の中では、楽しかった頃の思い出が巡っては、一つずつ消えていった。

緑の美しい丘、

庭の木苺、

僕とリア、シーグの3人で暮らしたあの家、

道端の花、

やさしくてあったかい母さん

研究をしている父さんの後ろ姿、

少し生意気だけどかわいい妹、

頑固だけど本当はやさしいじいちゃん

青い空、

空に浮かぶ月

月が落ちる、その前に、

僕は少しだけ大人になった。

それは痛みと汚れを伴うもので、

いつまでも子供で居たかった敏感な僕には、ひどく大きな衝撃になった。

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

ああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

僕の意識は、ここで、終わった。

To be continued...



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4137a/>

---

月が落ちる、その前に。

2010年10月31日09時34分発行